様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６３７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６９１１

研究課題名（和文）流鏑馬の起源・成立過程の実証的再検討―鎌倉幕府儀礼の源流と東アジア文化―

研究課題名（英文）Re-examination of the origins and the development of Yabusame : The origins of the ceremonious protocols of Kamakura Shogunate

研究代表者
桃崎　有一郎（Momosaki, Yuichiro）

高千穂大学・商学部・教授

研究者番号：８０５５１１５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：流鏑馬の出現から廃絶までの関係史料の収集・データベース化を概ね完了させ、流鏑馬の主な実践の場となった都市や組織（流鏑馬出現期の京都と、発展期の鎌倉幕府）の礼制上の性質、さらにそれらと流鏑馬の儀礼的特質の関係性の解明を進めつつ、流鏑馬興亡の諸段階をもたらした京都や鎌倉幕府の政治史的諸段階の解明に取り組んだ。その過程で、流鏑馬が《礼》思想と直結し、《礼》が古代中国の儒教に由来して《法》とともに古代東アジアの規範の重要な二本柱であった事実に行き当たり、古代東アジア（特に源流たる中国、媒介項たる朝鮮半島諸国、伝播先たる日本）における《礼》の基礎的事実の解明に着手し、青写真を描く段階まで至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
①武家政権と流鏑馬の関係史から、日本中世特有の統治思想を礼制史の側面から炙り出す手法の学術的有効性を確認できた。②射芸の礼制史的展開の追跡から、中国由来ながら独自性が高い日本の《礼》の特質の解明が進み、日本文化の未知の側面の理解に寄与した。③《礼》の基礎的研究と、それに法制史を総合する〝日本規範史〟という新たな学問的枠組みの構築が喫緊の課題であると提唱し、広義の日本文化史の中期的展望を提示した。

研究成果の概要（英文）：The database of documents related to Yabusame(from beginning to abolition) has been created. Based on that, ritual properties of the Kyoto city and Kamakura shogunate where Yabusame appeared and was practiced, Yabusame's own ritual properties and the relationships between them have been elucidated.
Concurrently, each political and historical phases (especially of Kyoto and Kamakura shogunate) and each phases of Yabusame's history(from the prosperity to the decline) are mapped.
In addition, based on these results, important facts have become clear. In particular, Yabusame's nature linked directly with the philosophy called "Rei" which was born in ancient China as a part of Confucianism, and Yabusame's properties are decided according to the balance of Rei and the laws. Therefore, this study has undertaken a research of essential facts about the history of Rei, especially how it's been born in ancient China as the origin and how it's changed until it's arrived at Japan via Korea.

研究分野：日本前近代礼制史

キーワード：流鏑馬　礼制　礼節　東アジア　礼　騎射　武士　武家社会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の開始当初において、流鏑馬という日本特有の騎射術については、淵源・沿革ともに不明点が多く、特に淵源については、既往の研究が複数存在したものの、定説というべき根拠の確かな学説が不在であった。流鏑馬は、鎌倉幕府において構成員が習熟すべき最重要の武芸系儀礼として全面的に採用され、室町幕府で衰退・断絶し、江戸幕府において復興された歴史を持つ。日本文化史における礼制史（礼節作法の制度的・社会的歴史）の占める割合は大きく、礼制史においては武家儀礼、特に幕府で採用された儀礼は極めて大きな一角を占め、それは武芸を伴うもの（武芸系）とそれ以外（非武芸系）に二分され、それらのうち武芸系の最たるものが流鏑馬であった。この学界周知の事実に基づく時、流鏑馬の淵源が不明であるということは、即ち、日本文化史の重要・不可欠の要素の正体が不明であることを意味し、したがって、流鏑馬の淵源の解明なくして真の理解に到達し得ない日本文化史もまた、停滞しているといわざるを得ない状況であった。

２．研究の目的

上記の背景に鑑み、本研究では、流鏑馬の起源から廃絶に至る沿革を、信頼性の高い史料の網羅的収集と、厳密な解釈に基づく基礎的事実の確定によって洗い直し、一定の信頼度を確保された流鏑馬の歴史の全体像を描き出すことを目的とした。

３．研究の方法

上記目的を果たすため、本研究では、古代・中世日本の、流鏑馬と関連事項が出現する史料を（文献史料を主体にしつつ、考古学的史料まで視野を広げて）網羅的に捜索し、データベース化した上で、時系列的に（古代の流鏑馬の黎明期から）分析する手法を採った。それにあたっては、流鏑馬の起源が部分的に中国大陸・朝鮮半島に由来することが予備的調査によって判明していたため、時代的な上限を設けず、また地理的な限定も設けず、関係史料の収集範囲を古代中国・朝鮮半島諸国まで広げた。

それによって収集し得た史料を分析するにあたっては、流鏑馬が実践された場、具体的には京都などの都市や鎌倉幕府などの組織が、儀礼体系の一部として流鏑馬にいかなる意義を見出し、いかなる意義を新たに与え、時代の変遷に伴っていかに変化させていったか、という観点が不可欠である。そこで、初期の流鏑馬の物理的な舞台というべき京都や、初めて流鏑馬を統治機関に必須の儀礼・技芸と位置づけた鎌倉幕府の構造を、物理的・理念的両面から解明する作業を並行して行い、もって流鏑馬の興亡・展開の各段階と照応させて俯瞰的に全体像を描き出す手法を用いた。

４．研究成果

上記の目的と研究方法に沿って、複数の研究成果を公表し得た。具体的には、雑誌論文８本（うち査読付き５本）、著書８冊（うち単著４冊、共著４冊）、学会報告（招待講演）１回である。これらにより、下記の段階まで研究が進展した。総じて、流鏑馬の起源の解明には至らなかったものの、その課題と不可分の関係にある日本中世史学の諸問題を新発見し、あるいは再発見して新たな意義と課題を示し、もって日本中世史学（特に文化史）の課題と展望・青写真を、広い視野に立って提示できたという成果に結びついた。

① 流鏑馬を不可欠の重要儀礼として初めて組織的に位置づけた鎌倉幕府において、そもそも儀礼がいかなる位置づけと重要性を与えられ、それが既存の社会や組織（主に朝廷や公家社会）といかなる接続関係／断絶関係にあり、それらがいかなる歴史的条件に規定されていたかを、鎌倉幕府成立期～終末期の全般にわたって明らかにした。

② 鎌倉幕府に続く武家政権である室町幕府は、多くを鎌倉幕府から継承していながら、流鏑馬の衰亡・廃絶をもたらした事実がすでに知られていた。それは、鎌倉幕府とは根本的に異なる儀礼観を室町幕府が持っていたことに起因すると予想され、日本国全体の歴史的段階と併せて、その儀礼観（の変容・結末）の大枠を一定度理解しておくことが、流鏑馬の歴史の後半部を理解する上で不可欠であることが判明した。その見通しに基づき、室町幕府、特にその主導者たる将軍（わけても、朝廷をも支配した将軍を室町殿という）の儀礼観について基礎的事実を解明することを、研究期間中の目標の一つに据えた。それに基づき、１４世紀半ばの室町幕府創立期から、解体期の始まりというべき１５世紀後半の応仁の乱頃までを視野に入れた室町幕府・将軍（室町殿）の儀礼の具体的歴史を洗い出し、政治史・社会史・法制史などの既存の知見を踏まえて、〈室町幕府において流鏑馬が置かれた歴史的環境〉を鳥瞰する作業に取り組み、成果を公刊した。

③ 調査研究を進めるにつれ、流鏑馬の歴史（特に起源）は、二つの理由から、流鏑馬単体の歴史を調べるだけでは解明不可能であることが次第に判明した。理由の第一は、騎射術である流鏑馬が、騎射術を必須の技能とする武士の発生と表裏一体の関係にあるらしいことが判明したからである。ところが、武士の起源に関する研究もまた停滞しており、本研究の基盤として採用できる信頼性の高い定説が存在しなかった。そこで、本研究では武士の起源につい

て、現段階の日本史学の水準に照らして最も信頼性の高い仮説を導く作業を行い、その成果を公刊した。

④ 理由の第二は、流鏑馬と《礼》思想の関係が一体不可分だという事実が判明したことである。流鏑馬は騎射術であり、騎射を含む「射」は、日本でも中国でも、君臣関係に代表される社会秩序を維持するために必須の儀礼として尊重され、そうであるべき根拠は《礼》思想に由来した。《礼》思想とは、古代中国で儒教の柱として生まれた思想である。流鏑馬の構成要素が《礼》思想だけに由来するのでないことは調査の過程で明らかとなったが、《礼》思想が不可欠の一部分であることもまた明らかとなり、したがって、流鏑馬の源流の解明には、どうしても《礼》思想の適切な理解と、流鏑馬との関係性の解明が不可欠ということが明らかとなった。ところが、〈《礼》とは何か〉という根本的な問いに対する信頼性の高い学問的定説が、日本史学においてはもちろん、中国思想史においてさえ存在しないらしいことが、調査を進めた末に判明した。そのため、流鏑馬の源流を探究するには、《礼》思想の歴史的沿革（起源や歴史的変容、そして朝鮮半島経由でのわが国への渡来・移入、さらにはわが国での独自の展開まで）を解明することが不可欠となったが、その具体的作業は少なくとも数年を要し、本研究とは別個のプロジェクトとして取り組まれるべきことも、予備的調査で明らかとなった。そこで本研究では、その次段階のプロジェクトを見据えつつ、〈《礼》とは何か〉という問題の解明が、そもそも既知のいかなる歴史学的問題といかに関わるのか、という問題点・課題の洗い出しを行い、本格的研究の端緒として、本研究の本来のゴールである〈流鏑馬とは何か〉の解明に至るまでの長期的展望を描き、公刊した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 桃崎有一郎	４．巻 41
２．論文標題 得宗専制期における鎌倉幕府儀礼と得宗儀礼の基礎的再検討	５．発行年 2018年
３．雑誌名 鎌倉遺文研究	６．最初と最後の頁 24-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎	４．巻 29
２．論文標題 綱光公記―宝徳二年正月～三月記―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	６．最初と最後の頁 133-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 桃崎有一郎	４．巻 37号
２．論文標題 北条時頼政権における鎌倉幕府年中行事の再建と挫折―理非と専制の礼制史的葛藤―	５．発行年 2016年
３．雑誌名 鎌倉遺文研究	６．最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 桃崎有一郎	４．巻 41号
２．論文標題 鎌倉幕府椀飯儀礼の完成と宗尊親王の将軍嗣立	５．発行年 2016年
３．雑誌名 年報中世史研究	６．最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桃崎有一郎	4．巻 651
2．論文標題 鎌倉幕府椀飯役の成立・挫折と〈御家人皆傍輩〉幻想の行方―礼制と税制・貨幣経済の交錯―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 日本史研究	6．最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桃崎有一郎	4．巻 55
2．論文標題 北条氏権力の専制化と鎌倉幕府儀礼体系の再構築―得宗権力は将軍権力簒奪を志向したか―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 学習院史学	6．最初と最後の頁 17-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎	4．巻 27号
2．論文標題 綱光公記―文安六年（宝徳元年）四月～八月記―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	6．最初と最後の頁 106-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桃崎有一郎	4．巻 684
2．論文標題 鎌倉末期の得宗家儀礼に見る長崎円喜・安達時顕政権の苦境―得宗空洞化・人材枯渇・幕府保守―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本史研究	6．最初と最後の頁 31-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 桃崎有一郎
２．発表標題 初期鎌倉幕府のアイデンティティ模索と表現メディア開拓―礼制×法制の二重螺旋が架橋する公武政権―
３．学会等名 日本史研究会例会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計8件

１．著者名 中世学研究会	４．発行年 2018年
２．出版社 高志書院	５．総ページ数 210
３．書名 幻想の京都モデル 第1巻	

１．著者名 桃崎有一郎	４．発行年 2018年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 336
３．書名 武士の起源を解きあかす	

１．著者名 榎原雅治・清水克行編、、2017.10.10、pp.138-156）	４．発行年 2017年
２．出版社 戎光祥出版	５．総ページ数 423
３．書名 室町幕府将軍列伝	

１．著者名 高谷知佳・小石川裕介編著	４．発行年 2018年
２．出版社 有斐閣	５．総ページ数 327
３．書名 日本法史から何がみえるか	

１．著者名 桃崎有一郎・山田邦和ほか１３名	４．発行年 2016年
２．出版社 文理閣	５．総ページ数 541
３．書名 室町政権の首府構想と京都―室町・北山・東山―	

１．著者名 桃崎有一郎	４．発行年 2016年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 276
３．書名 平安京はいらなかった―古代の夢を喰らう中世―	

１．著者名 桃崎有一郎	４．発行年 2020年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 350
３．書名 室町の覇者 足利義満――朝廷と幕府はいかに統一されたか	

１．著者名 桃崎有一郎	４．発行年 2020年
２．出版社 文藝春秋	５．総ページ数 288
３．書名 「京都」の誕生――武士が造った戦乱の都	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考